

企画名： フィールドネット・ラウンジ： 老い——「問題」として、「経験」として

企画責任者： 池田昭光（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

アドバイザー： 小田亮（首都大学東京大学院人文科学研究科）

日時： 平成 28 年 12 月 4 日（日曜日）午後 1 時より午後 6 時 10 分

場所： AA 研 304 室

プログラム：

●開会の辞：フィールドネット・ラウンジについて 太田信宏（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

●趣旨説明：老い——「問題」として、「経験」として 池田昭光（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所） 「高齢者」よりも「老い」の語を重視することにより、高齢者を社会問題として語るのではなく、社会文化的多様性から語るという趣旨を説明したうえで、R・マーフィー『ボディ・サイレント』の持つ可能性について提示した。

#### セッション1：「老い」へのまなざし

●「老人問題と老人「の」問題——沖縄都市部の人類学的調査研究からみえてくるもの」菅沼文乃（南山大学人類学研究所） 沖縄・那覇市の独居老人の社会関係構築に関する事例をもとに、伝統的な「老人」像に当てはまらない、むしろ「老い」を自己の日々の活動の中で構築するありかたについて論じた。

●「高齢者の扶養と国際送金——台湾＝インドネシア間のグローバルな世帯保持」横田祥子（滋賀県立大学人間文化学部） インドネシア・カリマンタン島の、台湾への婚姻移民の事例を報告し、世帯の維持自体が女性たちからの送金により支えられていること、ゆえに高齢者の扶養も移民現象との関わりで論ずべきであると指摘した。

#### セッション2：中東——「老い」の新たなフィールド？

●「威厳と衰えをつなぐもの——2010年代エジプトで考える「老い」の相対性」鳥山純子（日本学術振興会／桜美林大学） 発表者自身の夫の親族が抱く高齢者像の事例を報告し、年長者が敬われるというエジプトの高齢者像が、近年の社会変化に見られる「拝金主義的」傾向のもとで大きく変わりつつあることを指摘した。

●「他者の死に接し、人生を顧みる——エジプト都市部での地方出身者による追悼式参列事例から」岡戸真幸（人間文化研究機構総合人間文化研究推進センター／上智大学） 上エジプトの「頻りに葬儀に出かける」インフォーマントの事例をもとに、葬儀への参列が共同体や同郷者の一体感を形成するうえで欠かせないが、老いによる衰えが、こうした紐

帯形成を難しくする面があると指摘した。

●「凶太さと希望——生命予後が限られた疾患をもつイラン人の若者の結婚選択」細谷幸子（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所） イランにおけるサラセミアの患者について、日常生活を日々調整しながら達成したり、健常者に近づくことが「成功」とされる言説と距離を取ったりする様子を報告し、大きな「成功」よりも日常生活における小さな「希望」に着目すべきであると指摘した。

### セッション3：総合討論

●コメント1 関根里奈子（一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程） 老いを問うことは、社会的な構成を考えることであるとの指摘をもとに、ケアをめぐる権力関係、家族以外で作るネットワークの重要性について示唆した。

●コメント2 小田亮（首都大学東京大学院人文科学研究科） 経験の多様性は、現代ではそれ自身が「個人化」として社会によって生みだされている側面があるため、多様性を人類学の問題として打ち出すことを批判した。そのうえで、介護を交換論的な視点から見ることの可能性について指摘した。

●全体討論・質疑応答

### 実施報告

「老い」は、日本を含む東アジアや欧米では「高齢者問題」として知られている。しかし、「高齢者問題」が物的・人的な資源配分の問題（誰をどのように生かすために、どの資源をどこに投入するか）として語られる際、そこからは具体的な顔を持った個人の経験は捨象されがちである。他方、人間誰しもが年を重ねるという意味では、「老い」は普遍的な「経験」であり、あらゆる地域に偏在し、社会文化的に具体的な形で現れる。本ワークショップでは、「老い」をめぐる「経験」の多様性を、フィールドワークの知見にもとづいて検討することで、顔の見えるものとして検討することを全体の趣旨とした。

ワークショップの狙いのひとつは、「高齢者」よりも「老い」の語を重視することで、「高齢者問題の研究」「高齢者の研究」にとどまらない、老いの経験に関する広い視野を確保することであった。発表者は、様々な側面から、各人のフィールドに即してこうした意図を踏まえた発表を行った。例えば、個々人が取り組む課題としての「老い」に着目し、それを「老人問題」とは区別される「老人の問題」ととらえる（菅沼報告）、高齢者のケアもその一部として含まれる「世帯維持」の問題としてとらえる（横田報告）、そもそも老年期まで生きることの難しい遺伝性疾患の患者を対象とする（細谷報告）といった取り組みがな

された。これらにより、「老い」の研究が、カテゴリとしての「高齢者」研究にとどまらない、多方面からの取り組みが可能な、調査・研究における交差点のような可能性を持つことが明らかになったと言える。

また、本ワークショップでのもう一つの成果が、中東地域における「老い」の事例報告であった。相対的な意味で高齢社会化が「社会問題」として浮上していない中東地域からの事例報告・議論を行うことで、これまで同地域ではそれほど注目されてこなかった「老い」の視点を持ち込み、中東を「老い」の新たなフィールドとしてとらえようとする狙いがあった。

主催者は、中東地域をフィールドとする人類学的研究の成果は、どちらかといえば中東地域研究が主題となる場において発表される傾向にあり、他地域をフィールドとする人類学者と接点を持つ機会が相対的に少ないという印象を持っていた。その点、今回のワークショップではイラン及びエジプトの二地域に関する三つの報告が行われ、地域的多様性の面でおお限定的とはいえ、中東地域に関するセッションを設けたことは、この地域に関する事例を積極的に紹介する意義を有するものであり、アジア・アフリカ言語文化研究所で主催するにふさわしい構成であったと言えよう。

総合討論では、初めに、個々の発表者に対して、自身の発表やワークショップ全体に関する感想などを求めた。これは、ワークショップ運営の工夫の試みとして行ったものであり、発表者相互に横のつながりを作り出し、その中から相互啓発を生み出そうとする意図に基づいている。実際に行ってみると、高齢者に自身の視線が偏りがちであったと反省的にとらえたり（菅沼）、自身の報告には高齢社会に向かいつつある中東地域の突端が反映しているととらえられないかという新しい解釈を提示したり（鳥山）、そもそも自身のフィールドというのは「老いを経験しない」社会ではないかという新鮮な着想を口にしたり（岡戸）という具合に、研究関心・地域を異にする研究者と場を同じくすることによって新しい発見が得られたとうかがえる発言が見られた。こうした工夫は、今後も共同研究の場で活用していきたい。

他方、老いの経験が男女で異なることは容易に想像されるにもかかわらず、個々の発表を通じて、ジェンダーや性といった論点が明示的には取り上げられなかったのは何故か、という問いがフロアから発せられた。確かに、婚姻移民（横田）、男性性（岡戸）といった点に関わる報告はなされたものの、それらが「老いとジェンダー」のような形で真正面から問題にされたわけではなかった。垣間見えてはいるが結局は埋もれてしまう問題が聴衆によって指摘されたことは、きわめて生産的であり、事実、この問いは総合討論の場において最も重要な指摘であったと言える。討論の場では、医療化という現代社会のシステムのありようが、ジェンダーによる違いを均質化させてしまい、そのようなものとしてしか「老いの身体」が扱われなくなっているのではないかと、として議論の展開がいくらか見られた。この解釈の妥当性はともかく、医療や福祉といった近代的制度が当該社会での老いの経験をどのように構造化するか、さらには、どの程度研究者の視点にまで影響を及ぼす

のかという点は、やはりプログラム作成の段階から問題化されるべき点であったのかもしれない。

今後の課題としては、今回は人類学者を主体に企画を構成したのを、他の学術分野との対話をどのように展開していくかということが挙げられる。先に記した、老いの経験とジェンダー・医療化をめぐる問題は、この課題が端的に現れた例だったと言えよう。個々のフィールドにおける近代的諸制度のありかたは様々であるとはいえ、医療社会学、生命倫理学といった諸分野との接点は、今後の展開を考えるうえで考慮すべき点であろう。